

第9回安曇野市新市立博物館構想策定委員会 会議概要

1	会議名	第9回安曇野市新市立博物館構想策定委員会
2	日時	平成27年8月20日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで
3	会場	安曇野市役所本庁舎 共用会議室 301
4	出席者	笹本委員長、石田副委員長、福島委員、平田委員、浅見委員、滝沢委員、浅川委員、小椋委員、酒井委員、大月委員、西垣委員
5	市側出席者	教育長、北條教育部長、那須野文化課長、西山博物館係長、小倉博物館係員、逸見博物館係主査、亀山(乃村工芸社)
6	傍聴人	2人 記者 2人
7	公開・非公開の別	公開
8	会議概要作成年月日	平成27年8月26日

会議事項等

1 会議の概要

1. 開会 (北條部長)
2. 笹本委員長あいさつ
3. 協議事項
 - (1) 新市立館構想書【案】について
 - (2) 提言(案)について
 - (3) その他
4. その他
5. 閉会

2 会議概要

1. 開会

北條部長・皆さまお疲れさまです。定刻となったので、ただ今から第9回の安曇野市新市立博物館構想策定委員会を開催する。新市立博物館構想書の素案について検討していただいたが、今回が構想の案ならびに委員会からの提言について最終案として取りまとめをさせていただければと思う。今後、構想書については、本日提言をいただいた後、市のほうで最終調整を行いながら9月下旬からパブリックコメントを1カ月間行う予定である。パブリックコメント終了後、市としての意見を提供させていただき、政策会議等を経て、最終的にはもう一度、12月ころを予定しているが、この構想書の確定版についてご報告をする機会を設けさせていただければと思うので、どうぞよろしく願いいたします。

なお、本日は小林委員が都合により欠席をされている。この委員会にかかる設置要綱第6条第2項の規定により、半数以上の皆さまが出席をしているので委員会として成立をしていることを報告させていただく。

それでは、笹本委員長からごあいさつをお願いします。

2. 委員長あいさつ

委員長・皆さん、お忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。

実は、私は去る6日から13日までタイにいた。例の爆発事件があったすぐ横に伊勢丹というのができたけども、あそこで買い物をしてきた。タイへ行って、日本語で講演を二つやってきたような次第である。向こうへ行ってつくづく思うことだが、やっぱり日本は素晴らしい。とりわけ安曇野は美しい。四季を持っているだけでも素晴らしいなと思ってきた。そういう私たちの市について学んでいくための博物館をどうしていくかということで、皆さまにお集まりいただき本当にいろいろいいご意見を頂いてきた。先ほど北條部長から話があったとおり、長い間本当にご助

力いただいたけれども、今日で博物館構想に関する審議は最後になる。ただ、市のほうから今話があったとおり、パブリックコメントを通じてどうかたちに最後になったかという報告をいただく。ですから会は、もう一度12月ごろに開く。基本的には私たちの思いがどのくらいこの構想案の中に入っていか、それからそのことを通じて安曇野の未来がどうあるべきか、ぜひ今日は最後だということでご意見を頂けたらと思う。今日もよろしくお願いたします。

北條部長・どうもありがとうございました。それでは、これからの議事進行を笹本委員長からよろしくお願いたします。

3. 協議事項

委員長・それでは、これから協議事項のほうに入っていきたいと思う。いつものとおりこの会議は会議録を作成するため、発言の前には名前を名乗っていただきたい。それから本日の会議終了予定時刻は午後3時30分である。いつものように、ぜひご協力のほどよろしくお願いたします。

(1) 新市立館構想書【案】について

委員長・それでは早速、協議事項に入っていきたいと思う。まず、皆さまのお手元にある新市立博物館構想書【案】について、事務局のほうからご説明をお願いたします。

(那須野課長より 資料1「安曇野市新市立博物館構想(案)」前段の説明)

委員長・以上で説明は終わったが、ちょっとすみません、皆さん見ていただけたと思うが、私はすごく事務局が頑張っていたなと思っていて、全体の文章も非常に良くなっているし、それからこの表紙は合成だが非常に僕は気に入った。というのは、安曇野を象徴する常念、押野領域でチョウゲンボウが飛んでいると。チョウゲンボウは、恐らく私たちがつくろうとしている博物館のシンボルのように高く飛翔していると。先ほど副委員長と話をしていたら、副委員長のほうから、できたらそういう説明を一番後ろに一言入れてほしいと。この写真の意図するところを入れてくれたらいいねと話が出たんですが、そんなことを思うぐらい、皆さん、非常に良く今回作っていただいた。それで重要な点だが、19ページに出てきたように、私どもとしては博物館はつくるべきだと。これは一貫していると。ただ費用等の関係、それから合併特例債の話等があるが、今回15年から20年程度、私は逆にこれだけ時間をかけてつくつたらいいものができるだろうと思、すごくこれに期待している。そのためにも博物館準備センターが必要だと。建物を造るのを遅らせるなら、準備センターでしっかりやりましょう。中でも私たちが一貫して言っているのは、博物館は教育の施設であって、人づくりこそが安曇野の未来に大きな光を与えると。そういう流れの中で、博物館の準備室、組織をここに全面的に書いていただいた。建物以上に重要ですよという私どもの主張は全部入れていただいた。21ページのところで、博物館準備室の創設および博物館準備センター、これは先ほどのように、15年から20年となった場合にはどうしてもこれがしっかりしないとイケないということで、ここに大きく書いたということになる。以上のような状況だが、委員の皆さまからご質問、ご意見を頂きたいと思う。よろしくお願いたします。

委員・意見が二つある。まず、16ページ。付表を組んでこの前出てきたおおよその概算費用が出てくるが、その表の下に、例えば全国的な平均の単価が平米当たり100万なら100万であると、そういうことを一言でも書いてもらうと見た人は分かりやすくなるんじゃないかと思う。ただいきなりこの数字だけだと、たぶん高いなと言う人が出てくると思う。なぜそう高くなるかということその下の注釈にでも書いてもらえれば、見てすぐ分かるのではないかと思う。それともう一つは20ページだが、これはずっと前から出てはいたけれども、美術館グループの中に田淵記念館が入ると。ずっと最初から一貫だったが、田淵さんの場合は二つ仕事があって、一つは山岳写真の芸術でそれはいいかと思う。もう一つは高山蝶をはじめとするナチュラリスト

としての仕事。これはどうしたって自然科学だと思う。だから、一概に美術館グループのほうへというふうには私はいけないと思うけれども。例えば、ここは二股にかけることだって別に悪いことじゃないと思うが、そういう今言ったような考え方はいかがでしょう。

委員長・はい、お願いします。

那須野課長・まず、16ページの単価の関係であるが、いろいろ金額を出してきて幅を持たせるという中でこのようにさせていただいた。単純に平米数で割ったりすると確かに高いとかいうご意見が出てくるが、ここは私どももだいぶ検討させてもらったが、例えば新規施設の博物館の場合、ピンキリという言い方はちょっと語弊があるかもしれないが本当にいろいろで、要は入ってきて恐竜が出てくるような大掛かりな展示を考えれば、すぐ何億と跳ね返ってしまう。だから、そこをどう考えるかによって実はこの金額はものすごく変わってくるということで、ここに「用地・設計・展示費用を含む」というふうに書いてあるが、ここを細分化すればするほど、いろいろなご指摘に対して非常に回答がたくさん出てきてしまうので、これは相場として展示を含んでこういうものだということで、おおよその金額としてわれわれは説明して、あまり細かいところの議論に入らないようにしていきたいと思う。いずれにしろこれは構想であり、建設計画がいよいよでくると具体的な部分の金額というのは出てくると思うので、構想段階では一応新規でつくる場合は40億円ぐらいとか、あと博物館は新築と改築二つのケースがあり、既存のものにお金をかけると、いろいろなパターンがあるが、結局このぐらいかかってくるということを大体分かっていた。ということで、ちょっとここはあまり細かくと言うか、この程度でお許しいただければありがたいかなと思う。

それから20ページの田淵記念館のご指摘は、非常にごもつともである。ここの考え方だが、博物館グループと美術館グループというのは、その展示内容とか扱っているものについてはおっしゃるとおりだが、これを施設組織としてどういうふうに位置づけていくかということで、基幹博物館と基幹美術館を将来的に一本化して行って、例えば基幹博物館の下で、それぞれ下の館が機能していくというようなかたちを取っていききたいということである。ですから、いろいろ現状と課題の中で、例えば近世史については貞享義民記念館でも扱っているし郷土博物館でも扱っていると。こういう調整をどうしていくのかというところが、今のままだとそれぞれの館が独自に考えてやっていくということになり、ここに統廃合館も入っているけれども、将来的には基幹博物館の方針の下にそれぞれの館がバランスを取ってやっていくかたちにしたい。美術館についても、近代美術館の下にそれぞれの付属施設を同じように展開していきたい。ですから、それぞれできない部分をここでやってほしいとか、こういうことをやったらどうだとか、そういうことを館が連携しながらやっていきたいという。その中で、田淵をどっちに入れるかと非常に迷うところだが、今のところ自然科学分野と、それから写真関係の展示のウエイトを考えたときに、田淵記念館の場合は今の活動としては「むしの会」などもやってはいるけれども、主に田淵先生の作品を展示して、そういう活動が中心だという現状から美術館グループのほうに入れさせていただいたということである。従ってこれは今後組織的にどういうかたちにしていききたいかということ役割として書いたものなので、そんなことで捉えていただければいいのかなと思う。

委員長・よろしいでしょうか。

委員・分かりました。

委員長・ほかにご意見等はございませんでしょうか。

委員・余計なことだが、準備室と準備センターをつくるということは、当然人の手当も前提としているというふうに理解してよいか。

委員長・よろしく願いいたします。

那須野課長・21ページの一番上段だが、学芸員体制の充実ということは中にうたっている。取りあえず在野の研究者がいる、それから今、本市の美術館・博物館で直営施設では学芸員が2名しかいない。この在野の研究者の方が減っている中で、やはり人を育てていかななくてはいけないというのが、施設を建てるよりもむしろ大事な部分かなと思う。ただ、単純にここで人を増やすということは、

なかなかお約束できない部分も確かにあるが、少なくとも準備室を立ち上げていく段階では、そこにそれをやってもらう職員というのを手当てしていかないと動かないわけで、従ってこの19ページでも、準備センターの設置に先駆けて組織を立ち上げる中では、当然今の人員を含めて立ち上げにはかかわってくるけれども、この事業というのはコンパクト展示はしなきゃいけないし、統廃合施設の資料整理も始めなきゃいけないということからすれば、スタートラインは必要最小限になるかもしれない。そういったかたち、組織化をしながら進めていくという前提ではある。

委員長・どうでしょう。

委員・・当然、組織として立ち上げることになれば長は要るだろうし、センター長とか準備室長とかそういう方がいらっやると思うし、それからその事務を担当する職員も二つやっていると、私から見ると当然最低学芸員以外に2名は要るでしょうという話で、学芸員はどうするかという話はあるが、要するにそれも含めて学芸員の方に、そういう事務から何から全部お願いねという話はやめてもらったほうがいいんじゃないかなと。それじゃできないですね。整理もできないし。問題になるのは、豊科郷土博物館との兼業とか、そういうことのほうが問題になると思うが、なるべくそこの学芸員業務がちゃんと、2人も3人もというのは無理だと私も思う。そのへんのところはぜひ調整していただかないと、この準備室や準備センターというのは、かえって逆に日常の業務に差し障りを来すのではないかという私の感想である。

那須野課長・ご指摘は、ごもっともだと思う。将来そういうかたちが望ましいというのも非常によく分かる。ただ、手始めにというか、取っ掛かりというのはやはり誰かが始めていかなきゃいけないという点から見れば、最終的にそういうかたちになっていくとしても、スタート自体が整った状態であれば始まらないということでもないと思うので、そこは少し柔軟に考えていきたいなと思う。ただ理想とすれば、おっしゃるところは非常によく分かる。

委員・・限られた人的資源なので、過重な負担がいかないようにぜひご配慮願う。

那須野課長・文化財資料センターのほうは見ていただいたと思うが、今そこで約3万6000点の古文書の収集をして、全て写真に撮って、それから目録を作っているし、埋蔵文化財の土器・石器をはじめ遺物の整理、発掘調査の前線基地としても利用されている。実際のところ正規職員は今1名で、あと非常勤の体制の中でやってはいるけれども、方向性を示していけば、きちりとした相当膨大な量の資料でも、ここ4、5年できちんと集積できているという安曇野市の実績もあるので、そんなものも活かしながら、こちらのほうも考えていきたいと思う。

委員長・今お話があったように、基本的に私たちは博物館をつくるべきだと。つくるのが遅れるなら、当然のことだけれども準備センター、準備室は必要になる。となれば、即座ではなくても、まずセンターをつくるからには事務の人は最低いてもらわなきゃ困ると。だんだんに増やして行って、15年から20年までの間にきちんと中で論議ができる体制をつくりたいというのが本案である。ですから委員のご心配も非常によく分かるが、それを実現させるために、われわれは委員として、きちんと主張していきたいと考えている。
ほかにご質問等がございましたら。

委員・・今、委員長が言われたように、私も博物館準備センターができるなら、15年、20年の間に、いろいろ分かれているところにいる人たちが一所に集まって、そして次の新しい博物館ができるまでの準備もそうだけれども、市民が集いたくなるような、大勢の人が足を運んでくれるような博物館の構想というのは常に頭に入れてやっていっていただきたいなと思う。

委員長・もし何かあったら。

那須野課長・貴重なご指摘をありがとうございました。差し替えの21ページの中段に、博物館準備室の創設および準備センターの設置というところの1行目に、「統廃合館の資料の整理や後述するコンパクト展示の制作、新市立博物館建設計画等の策定」というふうに入れてあるので、将来的にそういうところで新しい博物館の中にどういう展示を入れていくかということは当然考えているということである。またいろいろ小調査をやっているの、そういう最新の安曇野市の文化財的な情

報というのもそこに集約され、それらも展示に結び付いていくことにつながっていくから、今ご指摘いただいた方向で考えていけたらと思う。

委員長・この構想書を作るに当たって、市の学芸員の皆さまは非常によく横につながって、今までの独立したような状況ではなくて、みんなでいろいろ考えるようになった。準備室が出てくれば、さらにその前を進めなきゃいけないということで、嫌でも委員が言われたような状況になってくるだろうと思う。また、そうならわれないと準備室を設ける意味がないので、きちんとそのようにしていくようにしたいと思う。

ほかにご意見はございますでしょうか。いつもよりおとなしいが、ということはよくできているということでもいいのかな。皆さんに何うが、私は本当に市の博物館の学芸員を中心として、今の那須野課長たちが必死で作り上げてくれた。私としては、よくこれだけの人材がいてくれたなという気がする。安曇野市に足りないことを課題に始めると、まだいくらでもあると思うが、ここまで来られたというのは、やっぱり皆さんが意見をきちんと言っていた。皆さんの言っていた意見を市の側もきちんと入れながら少しでもいいかたちを持ってきたという意味では、この構想案は私どもの作品でもあるわけで、私としてはぜひこの構想案を読んでもらえるようなかたちにしてほしい。「写真を多くしてほしい」と言ったら、きちんと入れてもらっているし非常にいいと思うが、まだ足りないところとか、要するにこの次までにやるときにさらにもっと良くするために何か意見がございましたら。

委員・内容は今、委員長が言われたように、まとまってきれいに表現されてよらしいと思う。ただ、ちょっと3ページの最初のスタートの文章のところ、「安曇野市では、平成23年」が抜けているのではないか。「23年9月に安曇野市振興計画」あとはよらしいです。

委員長・ありがとうございます。

那須野課長・すみません。ちょっとこちらで修正版を用意していたのですが、すみません。ありがとうございます。

委員長・どうもすみません。ありがとうございます。ほかに何かございますでしょうか。はい、お願いいたします。

委員・37ページの4の学び・創造というところで、学びの基本的な考え方で、「学び」にかっこを付けていただいたことによって、はっきり明確に分かっていいと思うが、前の原稿には3番目に「安曇野の文化を大切に伝えていく意識を高める」というのがあったが、それが今回は抜けている。次世代に伝えるという点は書かれているのでいいのだが、市民の中に文化遺産を大切に守り伝えていく機運をつくり上げていくという。明科でも文化遺産巡りとかいろいろな講座を地域の講師にお願いしたのだが、そのときにすごく強調されたこと、学んだことは、やはりその文化遺産を大切にするという姿勢がないと駄目だ、と。例えば石仏なら石仏を見たときに、あまりにも周りに草があったりしたら、それを誰に言われるでもなく自分でその草を取るとか、そういうように文化遺産に接したときに自分がどう行動するかという、それが大事だということを強調されていた。ですので、これは三つあったのが二つになって一つ減ったが、次世代に伝えるということは子どもたちのところに入っているからいいけれども、そういう文化遺産を大切にする市民の姿勢というか、それはちょっとどこかに入れていただきたいなという思いがある。

委員長・はい、どうですか。

那須野課長・すみません。後段の24ページ以降については、これから修正点の説明をいたしますので、そこの意見ということで承らせていただく。

委員・はい。

委員長・どうもありがとうございました。ほかにございますか。はい、お願いいたします。

委員・さっきの大月委員の指摘で思い出したのだが、年度ですね。これは元号じゃなくて西暦併記でということで以前変えてもらった、了解されたはずだが、至って長期の計画になると、もう元号そのもの自体があまり意味をなさなくなる可能性もある。西暦と元号の両方で。

那須野課長・はい、承知いたしました。修正する。

委員長・ありがとうございます。世界バージョンでいくと西暦は当たり前である。できたら、私たちの間にもグローバルな視点でどうしても必要になってくると思うので、そのようにさせていただきたいと思う。

ほかにございますでしょうか。

委員・19ページの表が今日ひとつ大きな話題になってきたが、以前、私どもは合併特例債というものをかなり強力に推してきたというような構想、大体5年間ぐらいで美術館なり博物館なりを整備していくことが前提だったと思う。今のお話だと準備室とか、そういったセンターをつくることも含めて15年ぐらい、完成するまでには20年ぐらいの時間が必要だということになってきているわけだが、この間の安曇野市の姿かたちというか、そういった市の状況みたいなものはこの構想の中でどんなふうに勘案されてくるのか。具体的に言えば、恐らく少子高齢化というのがこれから10年、20年と極度に進むだろうと思う。そういう中で、この間、委員からもお話があったように、例えば空き家率がどんどん増えて、そういう中で、人口が減るだけじゃなくて保管しなきゃいけない文化財みたいなものが逆に発生してくるといふか、そういったことも起こるだろうし、当然税収というのもそんなに潤沢になってくとも思えない。時間のスパンが長くなっているんで、そういった社会の流れの中で、この構想はどのような位置づけになっているかというのを、そういったことまで検討されて当然この表を作っておられると思うので、もし伺えれば、

委員長・はい、お願いします。

那須野課長・今おっしゃっていただいた中で文化財の管理という話は、恐らく管理されなくなったお堂があって、その中に指定文化財の仏像があって、それをどうするかとかいうお話かなというふうに向ったけれども、博物館が担う業務の中に入れるかどうかという基本的なところ、そういうものについては今のところ想定はしていない。ただ文化財業務の中では、実際そういうことが起こり得るということでわれわれも考えているが、ちょっとそこは切り離して考えたいと思う。おっしゃるところの新しい博物館が建てられるまでの展開というのは、今この計画の中で5ページに博物館の現状と課題という大まかなラインが挙がっていて、これらの課題解決をうたっていくその先に新規の博物館があるということである。その間は、この課題解決が全部きちんと解決されると、新しい博物館が建てられる前にこの課題が解決されるということは到底あり得ないわけで、できる部分とできない部分が当然出てくるということである。そのできる部分として考えているのが、やはりひとつさっきから言っている専門者を増やして学芸員体制の充実を図ってきたいということ。それから市民に対してのアプローチとすれば、現状の豊科郷土博物館ではいろいろ企画展をたくさんやっているが、例えば、今度閉館する部分の展示とか、先ほどまさに委員がおっしゃったように明科とか非常に重要な歴史があるが、今のところ館が閉館されている。実際にそれを具体的に資料として調べたいというときに、明科廃寺の展示というのは常時あるわけではない。こういう部分を何らかのかたちでフォローしていく必要がある。それを一番感じたわけである。そこで、ひとつには人を育てながらコンパクト展示といふか、いろいろな所に発信型の展示をする。それをつくる過程が学芸員を育てるということにつながるし、統廃合される館とか先ほど明科の大逆事件とか、そういうコンパクトな展示をつくり込みながら、いろいろな所でそれを展開していく。特に「みらい」「きぼう」、これからこういう学習センターも増えていくので、そういう発信型の展示・企画をしながら市民の皆さんにいろんなものを見ていただく。それが、その部分をフォローする一つのかたちなのかなというふうに思っている。いろいろとサービスをすればやらなければいけないことはたくさんあるが、こういう方向性が整えば、そのへんをフォローしていけるかと。全部を解決するには新設の博物館を待つしかないということであるが、そういうことであるのでご理解をいただきたいと思う。

委員長・全体として安曇野市は、私はちょっと違う市の構成員にもかかわっているが、この市はよそから見るとすごく恵まれていて、人口減少もよその想定から見るとはるかに少ない。現実にも今でもものすごく活性化を持っている市である。当然人口は減っているけれども、減っていく中でも本市は恐らく日本全体の中では非常にいい立場になっている。そういうところで未来を創っていく博

博物館がどうあるべきかということ論じた上に、私たちとしてはつくるべきだと。その間はどうすべきだということ今のような案を作っている、委員の言われたようなことに対してはきちんと対応できると私は信じている。

ほかにご意見等がございましたら、はい、お願いします。

委員・さっき委員がおっしゃったことと今の話のつながりなのだが、もし合併特別債が使えないとなると、10年から15年という、これは結構長い期間である。だから準備という言葉はふさわしくないかもしれない。もしかしたらそれ自体が非常に大きな試みであるし、準備期間というよりはそれ自体が博物館としての活動実践というふうにもむしろ評価したほうがいいのではないかと思う。控えめな表現で準備という言葉が使われていると思うが、むしろそういうかたちで博物館をつくるんだというふうにか切り替えて考える。その場合に、21ページの「準備室の創設、博物館準備センターの設置」という書き込みはこれで十分かという、そう考えると、もう少し市民の姿が見えてこないという気がする。準備の過程とは言え、そこも市民が、例えば市民が集う場とおっしゃっていたので、そういうイメージで、つまりセンターのイメージは、学芸員が集い、事務組織があって、整理場所があるというイメージだけでなく、もう少し豊かなイメージを持ったほうがいいんじゃないかなと、今議論を聞いていて思った。10年、15年とかになると、やはりそのぐらい考えておかないと新しい博物館につながっていかないのではないかという気がする。

委員長・はい、お願いします。

那須野課長・鋭い指摘だなと思う。実は、その考え方というわけではないのだが、この臨時的施設というのは、要は人寄せの施設、例えば条例で設置して、そこに大勢の人が来てもいいよという施設には恐らくなり得ないということである。それは耐震を満たした安全な施設ができるとはちょっと分からないが、仮定の話だが、どういう施設がくるかは分からない中で、やはり資料整理とか、要は見えない部分の業務をしているということで、市民の皆さんに提供されるのはコンパクトな展示とか、そういうことでのかわりは当然出てくると思う。それを例えば地域の公民館でやりたいといったときに、地域の方々にいろいろお話ししながら展示を考えると、そういう市民との結び付きは当然考えていいと思うが、この準備センターなり準備室なりで市民の方々と何かをやるというのは、通常の業務の中では実際のところは難しいような気がしないでもない。ただ、サポート的な協議会とか、そういうような市民の皆さんの組織から意見を聞きながら事業を進めていくのは可能な気もする。ここの文言を少し、市民の姿を入れられるように考えていきたいと思う。

委員・それでプラスアルファなのだが、ここに書き込む問題じゃないのかもしれないが、この文章を読んだだけだと私が冒頭で発言したみたいな発言が当然出てくると思う。ちょっと意識して言ったのだが、そうではなくて、既存の人たちの中で最低限の、既存の人たちがいる中で、おっしゃりたいように、よりその横のつながりをつけていく中で、未来を展望できる基盤をつくる意味が当然含まれてくるのは分かる。だけどこれを読んだだけだと、なかなかちょっと分かりにくいかなという気がする。そうすると日常業務も、ただ逆に言うと準備室で行う事業は、日常業務のそれぞれの館の事業を少し間引いてでもやるというようなイメージを持たないと、たぶんうまくいかないのではないかという気がする。そういうことはここには書き込めないと思うが、そういうイメージを抱くか、である。

那須野課長・実は、22ページのコンパクト展示との活動イメージというところに、学芸員を間引いたような図は一応付してある。ですから今既存の博物館・美術館施設の中で常時は難しいかもしれないけれども、こういう展示をやるときはちょっと手伝ってほしいとか、そういうかたちで学芸員を少し割きながら、最初から人を増やせとかいうことじゃなく、いろいろ試行錯誤はあると思うけども、イメージの中ではそんなことを考えていける図にはなっている。

委員・はい、分かりました。

委員長・今お話があったように、全体として私どものこの委員会では、すごく市民のこと、市民の視点か

らということがうたわれてきたので、先ほど委員から言われた市民目線の部分が弱いというところはちょっと中に書き込んでいただきたい。実は、市民のレベルが上がることが、いい博物館をつくる最低条件になってくる。学芸員の皆さんたちが今まで活動してくれたおかげで、いろんな視点が出てきたけども、さらにそれを上げていくことによって、より良い博物館ができることは間違いないので、今言ったようにその部分を付け加えさせていただければと思う。

ほかにご質問等がございましたら、よろしいですか。

那須野課長・後段に。

笹本委員長・はい。皆さんのご協力により、なおかつ市の側の努力により、今までのところに関しては一応これで同意を得て、後段に入りたいと思う。続きまして、市のほうでご説明をお願いいたします。

(逸見主査より 資料1「安曇野市新市立博物館構想(案)」後段の説明)

委員長・どうもありがとうございました。ただ今、後半部分の説明が終わったので、皆さまのほうからご質問、ご意見を頂きたいと思う。よろしく願いいたします。はい、お願いします。

委員・幾つかあるが、まず50ページの今説明があった市民の支援組織の意味は、市民が博物館を支援する組織という意味なのか。

逸見主査・はい。そのように解釈している。

委員・ということなのですね。これをぱっと見たときに、そういうイメージが入っているかなと思うのだが。市民の側から見たものではなくて、これは博物館の側から見た表現である。市民が博物館を支援してくれる組織と。

委員・すみません。われわれが博物館に物を申す機会は、きょうで終わりですか。つまり博物館がこれから運営されていくときに、市民の意見はどうやったら博物館に届くのか。

委員長・それ自体は、博物館協議会その他はずっと設けているし、博物館全体は今も対外委員等を含めていろんなかたちで意見を言っているの。これは、今私たちがやっているのは新博物館の構想委員、こうあるべきだということである。具体的な状況については、意見はきちんと言えるようになってきている。それから市民の中からの公募もありますので、それはいろんなかたちで言える。今問題になっているのは.....。

委員・新市立博物館の組織には、そういうものは入ってこない？

委員長・新市立博物館のも全部含めて、それはある。やることになる。

委員・市民だけはとか、そういうセクションはあるということか。

委員長・市民のというか、市民を含めた全体をきちんとやる部署が設けられる。どこでも市民だけの組織があるわけではない。今の前半部分だけで言っていると、委員が言われたのは、基本的な考え方として市民と共にある博物館と書いていながら、新市立博物館のイメージは博物館にとっての市民のイメージ、支援するのが当たり前みたいなイメージでしかないのではないかというふうに、強く言うとそう見えると。これは、やっぱりそういうふうに思う。ですからこの部分は少し手を加えていただいて、基本的にこれは博物館の側だけの話であって、市民の側からしたら博物館に対してどうなのかというところをちょっと付け加えて。

委員・「市民の支援組織」じゃなくて、「市民参加の支援組織」とやったらどうでしょうか。そうすると友の会とかボランティアとか気軽に参加できそうな気がする。

委員長・ありがとうございます。ほかにご意見等がございましたらお願いいたします。

委員・小さいことでもいいですか。

委員長・はい、よろしく願いいたします。

委員・27ページの方針の2だが、「誰もが親しみやすく」と、ここに「誰もが」と書いてあるので、その黒ボツの2番目に「障がい者にも配慮した設備を設けるなど」という、この障がい者だけというよりは、高齢者もいるし、いろんな方がいらっしゃるの、誰もがと書いてあるから、あえて障がい者と言わなくてもいいのではないか。しかも、「障がい者にも」というその表現は、小さな

ことだが、ちょっと何か温か味が欠けるような気がしている。

那須野課長・はい。

委員長・お願いします。

那須野課長・「ユニバーサルデザイン」とか「バリアフリー」とか、そんな言葉にちょっと置き換えるのでご了解ください。

委員・・そうですね。

委員長・大変大事なご指摘だと思う。今のように直しますので、よろしく願いいたします。ほかにご意見等はございませんでしょうか。

委員・・幾つか。

委員長・はい。

委員・・細かいことだが、45ページ。できれば非常に越したことはないのだが、上の機能1のところ、展示環境のすみ分けのところだが、温湿度管理の行き届いた展示室というのはどこのことなのか。展示室全体を温湿度管理するというのはものすごいコストがかかって、うちの館でもできているところはどこもない。企画展示室ですら、その室の温湿度管理を通常のアコンで行うというのは大変なことである。なので、そういう除湿機を設けるということはいいと思うが、そこを踏まえてどういった管理なのかなという気がする。広い空間を温湿度管理するのは非常に困難である。それが1点である。

それからもう1点は、51ページの統廃合博物館とのかかわりのところで、安曇野市文書館の文書館というのは古文書資料しか入らないのか。

那須野課長・ちょっとここで前後してしまってすみません。51ページの表だが、その先のことを言っているので、この博物館構想というのは荷が重すぎる部分があるので、表全体をちょっと削除したいと思う。そんなことをお願いいたします。

委員・・それから、もう一つは同じ51ページなのだが、いいでしょうか。

那須野課長・はい。

委員・・新市立博物館の学び・創造のところの、そこに「市民学芸員」という言葉と「ボランティアスタッフ」という言葉が出てくるが、これはどう違うのか。

那須野課長・いずれにしる51ページの表は削除になるので。

委員・・全体ね。

那須野課長・はい。それから、この「ボランティアスタッフ」と「市民学芸員」は両方併用していた経緯がありまして。

逸見主査・・以前、私どもの案の中で、一応私も立場を考えて、市民学芸員というのは学芸的な協力というか調査を市民にもやってもらう。ボランティアスタッフというのは知識とか学芸的な技術は必要ないけれども博物館のお手伝いをしていただくというような解釈で分けてはみた。ただ、市民学芸員にしるボランティアスタッフにしる、そういう名前が特定されてしまうと、この構想の段階でもう少し先というか、先がどうなるかちょっと分からないので、こういった性格を二分してしまう言葉は使わないほうがいいのではないかとということで、先ほどちょっとご指摘いただいたが、「支援組織」みたいなかたちでまた皆さんに考えていただいたという経緯がある。

委員・・ありがとうございます。これは私どもも抱えている問題で、市民が参加するというかたちがどのようなレベルであっても、そこに単に違いとか、逆に言うと上下関係とか優劣関係とか、そういうものが入るのはおかしい話なので、もし区分けするとしても、ぜひそういうものじゃない、研究員のほうが偉くてというのは変な言い方だが、ボランティアスタッフのほうがよりポピュラーだみたいな、そういうイメージじゃないようなものをもしやるとすれば、それは自戒の念だが、やっていただければという気持ちで申し上げた。

委員長・・どうもありがとうございます。基本的には今言われたとおりだと思うので、その点は心してやっていきたいと思う。

ほかにご意見等はございませんでしょうか。

委員・・27ページの(2)に安曇野らしい博物館とあるのと、46ページの下の展示のイメージ図だが、46ページは前回からずっと変化していない。つまり確か安曇野らしさは何かということできき詰めていってやったら総花的なものしか出てこないというのでは、いつも言っているとおりあまり面白くない。何かもう少しひとひねりして、ぴりっとしたような展示はできないものか。結局、やったらどこも同じように歴史・民族・産業・文化・人物がつつら出て、はい、安曇野ですよじゃ。

委員長・恐らくこれは、今の段階ではこういうものをつくりたいというだけの話でして、展示構想はきちんとまたつくるときに考える。しかも、今のように15年から20年を考えるとすることは、15年、20年研究していく中で、今われわれが考えるのとは全く違う新たな価値創造もできると思う。これは、あくまでもこういう絵になっているというか、これをもう少し安曇野らしいかたちのものをちょっと考えればいいと思うので。

那須野課長・委員のおっしゃるとおりで、ここは総花的で安曇野市の博物館を表していないというご意見は先般聞いておまして、その記述は確かにここに残っているので、ちょっと修正を加えてここにを入れていきたいと思う。

委員・一言だけちょっと書いておいてあげてください。

那須野課長・はい、分かりました。

委員長・ありがとうございます。ほかにご意見等はございますでしょうか。はい、お願いします。

委員・・44ページに図があるが、どこから話せばいいのかなかなか難しいが、そんなところまで検討しなくてもいい話かもしれないが、図に描かれている以上は言っておいたほうがいいかなと思ったので。そもそも有料を考えているのか、それとも全然有料じゃないのか。全部無料、もう料金は要りませんという話なのかというのがまず前提にある。どういうことかと言うと、動線計画の中の有料空間と無料空間という話と、それからもう一つは管理部門と公開部門という話の二つが入り乱れる。要するに、有料スペースと無料スペースの区別がないということになれば、どこでもぎりをやって、どこで券を買ってもらってみたい動線とか要らなくなる。それともう一つの管理部門との話で言うと、例えば44ページに、そこに資料中心の環境と人間中心の環境とグルーピングされているが、その人間中心の環境の左側と右側がまた分かれていて、右側がうちの館で言うと利用者、つまりオープンスペースということになって、左側の灰色というか薄緑色というか、これが管理部門だということになるが、なかなか難しく、今歴史館は学芸研究室とかそういう所まで人が入り込んでいる状態が現実になっている。

いろいろなボランティア活動や、それから古文書の自主的な勉強会があったりする話になってくると、特に学芸部門と一般のお客さんという市民の間の垣根というのはあまりないほうがいいということである。従って、学芸研究室、資料整理室、閉架式書庫とあるが、写真撮影する所、この辺りは実は下の右側の活動体験室とか市民協働室とか、こういう部分とどういつながりを持つのかということをも具体的なイメージとして持たないと、市民中心という話にはならないのではないかという気がする。それでもう一つなのだが、ここの空間の中には閲覧という考え方を反映していない。今、博物館はどここの館に行っても、今までは博物館は展示と、それから公会議室とか講堂みたいなのがあって、そこで話を聞くと。あるとしても実習室があって、そこでいろんな工作をやったりするということなのだが、最近はどここの博物館の施設に行っても資料を閲覧したり図書を閲覧するという、展示とかたちでの利用ではなくて実際にそのものを手に取ってみるといふ、そういう空間が必要になっているので、博物館にも、そういう閲覧スペースや市民向けの図書室というものはぜひ必要だと思う。そうしないと市民の活動を保障することにならないと思う。そこで学芸研究室に閉架式書庫とあるが、これは今うちの館の場合、図書は全て県民に開放するという考え方で、研究用図書とか学芸員用の図書というのは自分で買った本以外はない。県民が見たいと言ったら、自分の机の上に仮に館内貸し出しで借り出しているものも、「どうぞ、ご覧ください」と言って出すのが原則になっている。その代わりに、今はだいが削られたが図書室はそれなりに確保されている。県民に図書を見てもらうための本台ですという。それ

を職員は共用させてもらっているという考え方である。ただ、その考え方は理想としては非常によろしいのだが、実際に作業をする場合には、どうしても手元に置いておかなければならない図書が発生するので、そのへんの兼ね合いが必要かなと思うが、いずれにしても閲覧室や開架式図書というのは必備品だと思うので、どこかに入れていただければと思う。あと講堂がないというのも気になった。

委員長・こういったことに関して、取りあえずいろんな意見を入れて、どのくらいやれるかはこの次に出たところと、実は今日は意見が最後なので完成したものはここでお見せするわけにいかないの、そういう意見を少し言っただけであればと思う。実は、今のお話もすごく重要な部分があり、私は個人的には博物館は全部ただにするべきだと。市民が1人でも多く来てくれて初めて成り立つのだから、図書館と全く同じで、図書館に入るのにお金を取らないのは当たり前だと。そういう意味からすると、博物館に来てくれる人が1人でも多くするためにはただにするべきで、そうすると実はつくり方も全く違って来るだろうと。ただ、そういうのはここで論ずる話じゃないかもしれないので、今言った機能としてどういうものが必要であるかということで今のような話が出てきた。それから、本に関しても必ずしも全てオープンというわけにいかないところもいっぱいある。例えば私がいる信州大学の附属図書館の中で、オープンにしてはいけない本もあり、それから劣化等のことを考えて、あるいは貴重性から考えて、全ての図書をオープンにできない。そういうのはいろいろ可能性はあるが、ここでは取りあえず、こういうものはもっと考えたらどうですかという委員の指摘はすごく大事な点だと思う。

ほかに何かございますでしょうか。私は実は一つだけ気になりまして、38ページだが、創造の基本的な考え方が実は創造になっていないのではないかという気がしてならない。守るとかそういうことは言っている、例えば博物館ができることによって市民は何が違って来るのかという観点で言うと、私は市民の一体感をつくるとか、そこから何かを創っていこうというような発展性の問題として創造を考えて、市が出来上がってからこれだけたって、まだ一体感がない中で、新しい一体感が出てくると新しい文化が生じてくるはずだと思っている。けども、ここに出てくるのは、どちらかという創造の基本的な考え方は文化を伝える、われわれの側から地域振興へ、文化は創造するものであって守るだけではないだろうという気がするの、できたら一言でもいいから、市民にとって文化を創造する場である博物館ぐらいはやっぱり考えていただきたいなという気を持っている。

皆さん、ほかに何かご意見等がございましたらお願いいたします。はい、お願いします。

委員・今、委員長の話を聞いていたら、これは安曇野市がつくるものなので、視野が取りあえずは安曇野市というフィールドに限られるのは前提だと思うが、実は安曇野というフィールドを扱うということが、安曇野から飛び越えて外の世界に広がっていくんだよということをどこかに入れておいてもらいたいなど。学芸員の活動も、実は安曇野市のことをテーマとして掲げ、それを研究し展示をし話をしたりするけれども、そのことをやるのが外へ、要するに日本とか世界とかそういうところにもつながっていくんだよということをどこかに入れてもらえないか。

那須野課長・28ページの差し替え。

委員・・そうです。

那須野課長・先ほど修正版をお配りしたが、それはまさに今扱っているもの、そこに具体的なものを抜き書きして、本来やるべきだというのに扱われていないものを紫の丸で、細かいものまで調べるとまだあるが、それらを充実させることによって外にいろいろな発信をしていこうという。これは笹本先生のご指摘もいただいて修正したものなのだが、一応そういう意味で入っている。

委員・・分かりました。結構です。

委員長・今お話があったとおり、私としては、地域を知らなくてグローバルはあり得ない。グローバルというのは一番足元を見ることだと思う。博物館を通じて地域のことをしっかりすれば地域は発展するだろう。外側の枠は単なる博物館行為ではなくて、外に向けて私たち一人一人の市民が持つ誇りとか、いろんなものを描こうとしてこのようなかたちにした。

ほかに何かございますか。

委員・他館とか他市とか今のお話で関係もあるかと思うが、他の施設との協働とか連携とか、そういうものは考えないのか。それからもう一つは、先ほどの10年後、15年後というスパンの関係なのだが、ユニバーサルデザインとかバリアフリーの用語を使ってというお話もあったかと思うが、前も1回お話しさせていただいたと思うが、いわゆる情報技術というかIT絡みのところも今後急速な進歩ををすると思う。そういったものについての積極的な取り組みみたいな方向性をどこかにうたっていただければ嬉しいかなと思うが、いかがでしょうか。

那須野課長・ちょっと検討させていただきたいと思う。

委員長・今、委員が言われたように、全体として発信の問題はすごく今後大事になってくると思う。それがちょっと全体の中で弱いかもしいないので、その点は考えさせていただきたいと思う。ほかにございますでしょうか。

(2) 提言(案)について

委員長・もう一つきょう決めなきゃいけないというか、きょうは半分セレモニーも入っており、提言をきちんとやっていかなければいけないので、もし問題がなければ、続きまして提言(案)のほうに行きたいと思うがよろしいでしょうか。それでは、提言(案)につきまして事務局のほうからご説明をお願いいたします。

(逸見主査より 資料2「提言(案)」について説明)

委員長・どうもありがとうございました。以上で説明が終わった。皆さまのほうからご質問、ご意見を頂きたいと思う。基本的には、私どもの提言は「市立博物館の新規建設を提言します」というところが前提である。そのためにどういう意味を持っているかということを書き込んである。いかがでしょうか。

委員・文言でよろしいですか。

委員長・はい。

委員・下から8行目の赤い字で書いてあるところ。その一つ前から読むが、「安曇野の文化を育てるための理想的な拠点として」、その赤い字の「ための」を削除したほうがびったり収まるような気がする。「安曇野の文化を育てる理想的な拠点として、新規建設を提言します」というほうが収まりがいいような気がする。私の感覚だが。

委員長・そうしたいと思う。よろしいですね。ほかに何かございますでしょうか。はいお願いします。

委員・3点について。2番、2点目である。「育てる」というよりは「育む」とかというイメージである。それから、これはちょっとご相談事項だが、「学びの輪の中心となる博物館」。中心となくなってもいいのではないか。要するに学びの輪がいっぱいできてくる。そこにかかわる。そのイメージを言うためには、中心という言葉がどうしても気になる。いつも中心でなきゃいけないかと言うと、それはちょっと博物館にとって重たすぎるなという。そういう機会、チャンスを市民の方と一緒につくっていくというようなイメージにならないかと。

委員長・仮にの話ですけど、言葉としてはどうすればいい?

委員・そう言っているだけで、皆さんの意見を聞きたいと思う。学びの輪をつくるでもおかし。

委員長・輪を広げるとか。

委員・広げるとか、そういう感じかな。

委員長・今の委員の意見だが、ここにはいろいろと例えば「きぼう」もあり「みらい」もあり、いろいろな施設がある中で、博物館の意味は非常に大きい。でも、中心というかたちが本当にいいかどうかという点では言われるとおりだと思うので、例えばだが、「学びの輪を広げる博物館」とちょっと言葉を変えたいと思う。

委員・あり得るかもしれない。

委員長・ほかにございますでしょうか。一応皆さまから頂いたものを1枚の、すみません、きょう最終的には私は教育長さんにセレモニー的に渡すことになっている。その段階では現状のものだが、それをさらに直したかたちで最終的には行くというかたちにさせていただく。皆さまのほうから頂いたような言葉は入れ込んだ上で、趣旨は先ほど言ったように、ともかく本委員会としては、新博物館をつくることによって市民全体の文化が上がることを期待したいというのが私たちの立場であるので、それは全く変わっていないと。はい、お願いします。

委員・・もう1個よろしいでしょうか。下から3行目のところですけども、「また昨今、自然や歴史・民族など郷土の文化を研究し」という段落があるが、ここは「研究」が重点化され過ぎているような気がする。というのは、一般の市民のサイドで言えば、郷土の文化を愛しとか、地域にわれわれが住んでいて、ああ、いい町だな、いい風土だなというのを分かって、安曇野市をみんなが「いい所だね」と言えるようになる、そういう土壌をつくるのがやはり博物館なりの役割だと思っているので、あまり研究に特化しても、私も研究していないけど、研究しない市民がいっぱいいると思う。

委員長・恐らく学芸員というところに主体を置いてしまったために「研究」という言葉が出ている。「研究」という言葉の中に対してそれぞれのイメージがちょっと違うと思うので、今、委員から言われたような、本来は研究をするための博物館ではないはずなので、ちょっとそのへんの言葉を変えさせていただきながら。ちょっとすみません、もう1回アイデアを。

委員・・要するに一市民からしてみれば、必ずしも勉強もしていないし研究もしていないわけである。だけでも安曇野市がいい所だなと思いたい。そのいい所だなと思う根拠は、例えば博物館へ行って、こんな先祖の営みがあったんだとか、こんな文化があるんだということが分かれば、そういうものからつくられていく。

委員長：例えば、こんなのはいかがでしょうか。「地域を愛する市民や豊かな研究をする学芸員などの」というかたちで、主体は、愛するためにはきちんと研究して指導する人たちは、というかたちぐらいでいかがでしょうか。

委員・・その赤い部分は、そこも全て削除して、「また昨今、自然や歴史・民族などの」という、これを全部削除して、下の文章「私たち市民は」というところから今のところに出ていってはどうか。

委員長・そうすると、そうですね、全部今の赤い字の「私たち市民は」の前の2行を削るとすると、後のちょっと文章を変えないといけない。はっきり言って「市民は」が主体になっていった場合には、「地域を愛する市民や」というのは言葉としてはおかしい。まず先に、上の2行の「また」から「減っている」までを削除するということについてはどうか。

委員・・最後ができているから。

委員長・これはこのままでいい？

委員・・だから、やっていかなきゃいけない。

委員長・委員のほうからは、現実問題として認識を1回した上で市民はどうするかしなければいけないということを書いたほうがいいので、2行削る必要がないという意見だが、いかがでしょう。さまざまな意見があってしかるべきなので、もし問題がなければこれを残して、私たち市民はどうするかという部分、これが一番実は大事な部分である。「私たち市民は」のところの中が、このままでいくと「私たち市民は、安曇野の文化の価値を発信し、未来へと引き継いでいくためにも、私たち市民は愛する市民や」ではおかしい。市民は地域を愛しとかなんかにしないと、主語・述語の関係がおかしい。市民が学芸員を育てていく、これでいいのかな。追い込んでい過ぎて、だから変な言い方だけれども、もしそうなったとしたら地域を愛していかなければなりません、だけで切ってしまうのが市民であって、市民が学芸員を育てるところまでここで書く必要はないような気がする。どなたかちょっと。

委員・いろいろ盛り込み過ぎである。

委員長・そうですね。

委員・・1回そこを全部削除して。

委員・「地域を研究する」をなくして、「ためにも市民や学芸員などの」としたら、さらっといく。

委員長・もう1回言ってください。

委員・安曇野市民が、じゃないな、「未来へと引き継いでいくためにも、市民や学芸員などの人材を」と、「地域を研究する」というのを。

委員長・要らない。

委員・意識だけで言ったらちょっと。「ためにも、市民や学芸員などの人材を育てていかななくてはならない」。

委員長・「市民は、市民や学芸員などの人材を育てていく」というのは、

委員・それはおかしい。

委員長・おかしいですね。それはおかしい。だからすごく単純に言ったら、「私たち市民は、地域を愛する人材を育てていかななくてはなりません」ぐらいだったら分かるけれども。

委員・そのぐらいでいいのではないか。

委員長・学芸員の方は抜いても僕はいいと思うのだが。はい、もっと言って。

委員・「私たち市民は」、そこはいいですね。「安曇野の文化の価値を発信し、未来へと引き継いでいくためにも地域の良さを再発見し」。

委員長・それでいこう。はい。

委員・そうすると、私たち市民は再発見するという話になるし、「また学芸員などの人材を育てていかななくてはなりません」市民が育てる。

委員・市民が学芸員を育てると。

委員長・市民が主人公。

委員・市民が主人公。

委員長・でも、きついね。ちょっとそれはきつい。

委員・「市民が」と言うと、それはやっぱりきついと思う。

委員長・委員ぐらいの人だったら学芸員に、市民と渡り合えるけれども、きついな。

委員・学芸員だって、やはり主体性があると思う。

委員長・僕は、学芸員の部分は抜いてもいいと思う。「いくためにも地域を愛する人材を育てていかなければなりません」ぐらいで、市民なのだから市民は地域を愛すればそれでいいのではないかという気がするが。委員が「うんうん」と言ってくれている。

委員・地域を愛する人材。

委員長・地域を愛する人材を育て。

委員・そうそう、人材にまとめてしまえばよい。そのとおりなのだから。

委員長・あっさりと、それでいきましょう。

ほかに、大体こういう提言の部分は、最後だからしゃんしゃんと手を打つかと思うと、本委員会はきちんと、ああでもない、こうでもないということを言っているの、この緊張感はずごく大事だと思うので、まだあったらぜひどうぞ。はい、お願いします。

副委員長・いつも文章に点や丸を入れるところだけ言ってきたが、この場合も同じで、言いたいことは何なんだということをきちっと言えばいいんで、こんなに長々あれもこれも並べて言うのではなく、何々は何々です、これはこうですというふうに端的に述べるのが、一番提言というのは、文章の中で議論しているわけではないので、かくかくしかじかだからこうだ、こういう提言をいたしますと言えばいいのに、そこへいろいろ、私は読んでいて本当に息が切れる。歌を歌うときにはプレスがないと、どこだったら息つけてくれるんだという。このときにも嫌だったから、いろいろ言わなかったが、そういうあたりで、もうちょっと端的にこれはこうだというきちんとした文章組み立てをしないと、誰にも伝わってこないし、そのうちに、ああ、嫌になったと、こういうことになって読んでもらえなくなる。提言であるから、きちんとした言葉で短くさっと言いたいことだけ並べればよい。まだこれから15年、20年検討していかなければならないことであるし、委員の皆さんのおかげで立派な提言は十分に出来上がっているの、あとこれと手紙を提出すれ

ば併せて大きな立派な提言になるはずだと思っているので、私は今後そういうふうにして、大変評価しているけれども、表現の方法として要らない。

委員長・実は、私はこのところ、先ほど言ったタイへ行って二つ講演をしてきた。当然のことだが、私は英語ができないので日本語でやろうとする。日本語でやるときは、翻訳を前提にやるので主語・述語関係だけですごく短く切っちゃって、すぐ翻訳をしてというのをずっと繰り返す。その経験で言うと、こういう文章は翻訳を何も考えていない。お互い日本人なので分かるだろうという気になってやっちゃっているところがある。ただ、これからのことを考えると、今、委員が言われたように、私たちにとっても分かりやすくする、いわゆる過去の名文というのは、だらだらとつなげていって何を言っているか分からないけれども良さそうだという感じだったが、そうではないかたちにこれから変えていくためにも、主語・述語関係ははっきりしてやっていくようなところで、やれるところをやるというかたちにさせていただけないか。ただ、これに関しては大きくは、先ほどのとおり、私は今日はきちんとセレモニーだけはしていかなないと、もう1回来てというのは嫌ですから。内容的には、もう皆さんそんなに内容そのものに関しては異議を言っているわけじゃなくて、分かりやすくしろということで、最終的にはもう1回手直しさせていただきけれども、そんなふうにはさせていただけないか。

全委員・・・(了承)

委員長・いいですか。じゃ、すみません。今までのこの提言については、そういうかたちにさせていただきたいと思う。

4. その他

委員長・その他についてお願いいたします。

那須野課長・今の提言は、後にだいが差し迫った部分があり、できれば提言を頂くというかたちだけ取らせていただきたいので、今皆さんのご意見をふまえてこれから修正をかけて、提言書はきちんとしたかたちで直して、委員長から教育長に渡していただきたいと思うので、ちょっとお待ちいただけたらと思う。

それから、ちょっと1点。先ほど委員からのご指摘で、安曇野市らしい博物館の記述は、実は27ページに加えている。私のほうで失念していた。前回と違う部分で、27ページの(2)のところに入れてある。安曇野市らしい博物館とは、これも委員から、まず総合博物館でなければならないというところを基本として、今まで例えば化石を寄付したい、寄贈したいという方がいるけれども、市のほうでなかなか受け入れ体制がないというようなことで滞ってしまっているような事例もあるので、やはり今後安曇野市のいろいろなジャンルを幅広く受け入れる博物館になっていきたいということで総合博物館と言わせていただいて、安曇野市の本質的な価値を多面的に明らかにする活動をしていきたい。特に、ご指摘があった北アルプスの景観や自然などの要素は安曇野市の普遍的な魅力として認識されているにもかかわらず、博物館で取り上げていなかったということから、こういうものを内外に発信していきたいという決意をここで述べさせてもらった。これをかたちにしたのが、先ほど配り直した28ページの図ということになっているので、そんなところでいかがでしょうか。

委員・・・例の46ページのイメージ図は、イメージ図はいいか。その上の2行の文章は、これはずっと会議を何回やっても同じ文言だから。

那須野課長・そうですね。

委員・・・ここのもちょっと変えていただくと通りが良くなるのではないかというのが、さっきの私の提案である。

那須野課長・はい。分かりました。

副委員長・もう一つは今の(2)のところ、最後に図表10と参考資料で言って、19ページの図表を参考にさせているのか。

那須野課長・失礼しました。これは13の誤りである。

副委員長・そうですね。

那須野課長・すみませんでした。

副委員長・どうもじっくりこないの、おかしいと思って。13でいいの。

那須野課長・今回配り直した、それは13である。

副委員長・この大きな、これだとね。これは前の10よりも大きくしていただいて、下の写真も大きくていいでしょう。大きくしていただいていいことだと思う。

笹本委員長・今、提言書のほうを作っていたけども、今までの話のとおり本当に本委員会の委員の皆さんは真剣に細かい点までやっていただいていたし、それで私としては今の私たちが知っている安曇野らしさというのは、私たちが知っている知識にすぎなくて、これから市民の皆さんがもっと地域を愛したり、学芸員の皆さんが勉強したりすると、違うかたちで安曇野らしさがいっぱい見えてくるだろうと思う。そういうものも含み込んで、時間をかけた上で博物館をつくることによって、よそと違うものが出てくる。どこでも同じような金太郎あめみたいなものではないだろうと思うので、時間をかけるということは、逆に私は合併特例債でないほうが良かったなと内心は思っているぐらいで、委員のほうからはお金の問題が出てきたけども、そういうことを全部含めて言うと、私たちは少しこれから長い目で、できたら委員の皆さんには監視役になっていただきたい。学芸員を含めて、市の博物館・美術館が成長していくに際して、できるだけいろんなかたちでご意見を言っていて、成長していく糧にさせていただきたいと思っている。

委員・委員長、すみませんが。

委員長・はい、どうぞ。

委員・提言書のところで、年号が二つ出てくるというのは、その西暦はいいの。

委員長・横のところに西暦を入れていただく。ただ、下のほうの場合は、市の公式文書は今は書類上、全部元号ですよ。

那須野課長・西暦は入れないですね。

委員長・西暦は入れないですか。これは仕方ない。私としては珍しくちゃんとしたはんこを持ってきて、いつでも出せるようにということで、サインをしてはんこは押してあるが、今からもう1回サインをして、はんこを押し直すので。何かやはりこの際だから言っておいたほうがいいのかがあったら、はい、お願いします。

那須野課長・では、その時間を借りて、今後の日程、スケジュールについてご説明する。

(西山係長より 今後のスケジュールについて説明)

委員長・ありがとうございました。先ほども言ったが、普通私たちはこうやって出せば終わりだが、その結果としてパブコメを含めた構想書でこのように出したということをきちっと報告をくれるということなので、もう1回、第10回が12月中旬にあるということをお聞きいただきたいと思う。ただし、これはもう確定しているものですから、私たちに対する報告、これが主体になってくる。

部長・委員長、すみません。

委員長・はい。

北條部長・補足だが、これから今提言書の修正をかけて皆さんにお配りして、今日は委員長から教育長に提言書を頂くわけであるが、構想については幾つかのご指摘を頂いているので、今日はかたちとしては出していただくけれども、その後の修正とか追記については委員長のほうともご相談をさせていただいて、その内容について来週の定例教育委員会に諮り、また実際の議会の情報提供、パブコメ前には委員の皆さま方にパブコメの案について、今回ご意見を頂いた内容を事前にお送りをさせていただくということでご了解をいただければ、今日は提言書と一緒にそれらも含めて構想書を提出いただくというふうなかたちを取らせていただこうかと思うが、その点についてちょっとお諮りをいただければと思う。

委員長・いかがでしょうか。私としては、今まで本委員会で話し合われたことはきちんと事務局のほうでは入れていただいた。それで全て確認してからというわけにいかないと思うので、今から提言書に関しては一応皆さんもう1回目を通していただくけれども、こちらのもう一つのほうに関しては、今日皆さまのご意見を含み込んで文章を手直しさせていただいたものを正式に出すということで、できたらご了解いただけないでしょうか。

全委員・・・(了承)

委員長・ありがとうございます。では、そのようにさせていただきます。

北條部長・・・では、ちょっとお待ちいただいて。今、修正をかけているので、もう少し時間がかかると思う。

委員長・はい。今、修正をかけていただいているが、どうぞ。

委員・・・すみません。このこととは別に、今後のお願いというか。準備委員会みたいな組織的なものができたときに、発信していくというお話だが、もう既に新しい博物館が動き出しているというような意識でいていただいて、実は今までのを見ているとほとんど目線が高くて、対象の年齢層が高いような気がする。その中に、これからコンパクト展示とかやる中では、幼児とか小さい年齢の低い子ども対象にしたような、体験型をこれから入れると書いてあるので、そのようなものを入れて、次世代を担っていく子どもたちとか、その親御さんとかが、博物館ってこんなこともやるんだとかいうことを体験していただいて、ぜひ博物館はつくってほしいな、そういうのを未来に残してほしいという声が市民からあがっていくような、そういうものはもう既に発信していったほしいなと思う。お願いします。

委員長・ありがとうございます。私は博物館協議会の議長もやっているので、またそこには今ここにおいてになっている委員も入っているので、そういったことも含めて、私どもとしては従来から見ると博物館は随分変わりつつあると思っている。私どもも本当にいろんなことを言いながら、学芸員の皆さんと共に地域をどうやって良くするんだということで展示の仕方までだいぶ変わってきているように思う。委員の言われたようなかたちが少しでも取れるように、今事務局のほうも聞いているし、私どものほうもそういう意見を持っていくようにするので、委員、いいですね。

委員・・・はい。

委員・・・よろしくをお願いします。

委員長・すみません。はい。

那須野課長・すみません、大変お待たせしました。一応、今先ほどご意見があった部分に修正をかけてみた。ちょっとご覧いただいて、それでいいかどうか再度ご確認だけお願いします。

委員・・・5行目の段落が一つ、1字忘れている。2015年の後にスペースが一つ入っている。

委員長・ワードだから、1段違うとどうしてもこうなってしまう可能性がある。

那須野課長・そうですね。半角が入っているので。

委員長・できたら、このくらいは許していただけないでしょうか。また作り直すと全部やり直してというのは。

那須野課長・今のうちでしたら。

委員長・いいですか。これでやらせてください。私はもう既にはんこを押してしまった。

那須野課長・新しいものを。

委員長・あ、そう？

(委員長、必要事項記入)

委員長・はい。今確認していただいた。副委員長のはんこがないということで、名前も間違いのないそうですので。ここまでチェックされるとは思わなかったな。

北條部長・・・どうもありがとうございました。

それでは、笹本委員長から橋渡教育長に対しまして、新市立博物館構想に対する提言書と構想書の提出をお願いしたいと思う。

委員長・それでは、私どもの委員会の総意として、このような提言書を作りましたのでよろしくお願いいたします。

橋渡教育長・はい。どうもありがとうございました。

(提言書、構想書の提出)

(写真撮影)

橋渡教育長・ありがとうございました。

委員長・・よろしくお願ひいたします。

北條部長・・皆さんお座りになっていただければと思う。

では、橋渡教育長よりごあいさつを申し上げます。

橋渡教育長・新市立博物館構想策定委員の皆さまには、昨年10月に第1回の委員会を行いまして、それから約10カ月に及ぶ長い期間、安曇野市の博物館がどうなったら良いかということに関しまして本当に毎回熱心なご協議をいただいた。誠にありがとうございました。おかげをもちまして、このたび構想書ならびに提言書を先ほど笹本委員長から頂戴した。今後は皆さまのことを最大限に尊重して、安曇野市としての博物館構想を策定してまいりたいと、このように考えている。本当にありがとうございました。

5. 閉会

北條部長・・どうもありがとうございました。昨年度から9回を数える委員会があった。もう一度、12月中旬ぐらいを予定している最後の委員会もあるが、実質的な審議は本日で終了ということである。先ほども申し上げたように、今日頂いたご意見に修正をかけて、定例教育委員会、また理事者協議等を踏まえてパブリックコメントを実施していくので、どうぞよろしくお願ひいたします。

以上をもって、第9回安曇野市新市立博物館構想策定委員会を閉じさせていただく。大変ありがとうございました。

以上